



(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

核戦争防止国際医師会議のあゆみ

大北 威

十月七日から十日までの四日間、真新しい広島国際会議場において、第九回の核戦争防止国際医師会議（I P P N W）世界大会が開かれた。この大会には、国外七十六カ国から約千名の、また国内からは約二千名の医師、それに数十名の医学部学生、医療従事者らが参加した。この数は予想を上廻るものであり、また従来の会議にも増してアジア、アフリカ、中南米などから多くの参加者のみられたことも一つの特徴であった。

I P P N Wは、核戦争防止のための知識の普及・啓発と、こうした理念達成に関する諸種の活動を行う医師組織の国際連合体である。その活動の基本構想を、(一)人命と健康を守る医師の職業上の義務に基き、核戦争防止のためにつくす、(二)活動の焦点を核戦争および核軍拡競争にしぼる、(三)会員には全世界の医師を対象とする、(四)核戦争に関する情報を広く一般の人々や各国の指導者に伝える、(五)いかなる党派にも属しないで、常に中立の立場を守る、としている。

一九五二年から水爆が開発され、五年にその実験に伴う第五福竜丸乗員やビキニ諸島住民の被災が世界に大きな衝撃を与え、これに触発されて、五七年に科学者によるバグウォッシュ会議が発足したことは本紙十月号に述べられている。I P P N W会長の一人、B・ラウンは、P・ノエルベーカー（英、五九年度ノーベル平和賞受賞者）の講演に感銘し、六一年にボストンで核戦争の脅威を、殊に医学的観点から考える医師の会を組織した。彼らは七九年の世界の情勢から、核戦争勃発の危険性を改めて痛感し、ソ連、日本、英国などの医師に呼びかけ、八一年三月、ワシントン近郊でI P P N Wの第一回大会を開催した（参加十一カ国、七十四人）。日本からは市丸道人、庄野直美、秋葉忠利、と筆者が参加。医師としてのお互いの信頼関係の確立がまづ基本的な大切であることを教えられた。以後毎年一回の大会を持つことを申しあわせた。当時、欧州における地域的核戦争の論議が盛んであり、第二回大会は英国ケンブリッジで開かれた。J・

ロットブラッドはその講演で、後年「核の冬」と表現される状況について述べたが、この大会の初日、折悪しくフォークランド紛争が始まり、大方の注意を惹くに至らなかった（三十一カ国、一九八三年）。八三年の大会はアムステルダムで持たれた（四十八カ国、三百人）。I N Fの欧州配備が発表された年である。この会の討論では故パルメ首相が座長となり、核兵器に関しては保有国間に優越性の存在し得ないことを指摘した。八四年大会はヘルシンキで行われ、核戦争の脅威が青少年に与える精神的影響が注目された（五十三カ国、四百人）。世界保健機関を通じて、核戦争の医学的影響に関する報告が配布された。八五年の第五回大会はブタペストで開かれた（五十一カ国、八百人）。その主テーマは「対決ではなく協調をこそ」であった。この年にI P P N Wはノーベル平和賞を受けた。このあと八六年ケルン（六十一カ国、五千人）、八七年モスクワ（五十三カ国、三千人）、八八年モンテリオール（七十九カ国、二千人）と続き、本年の「ノーモア・ヒロシマ、この決意永遠に」大会を迎えたのである。各国の澤山の医師が広島・長崎を訪れ見聞した事は、それだけでも有意義であったといえよう。（国立名古屋病院長）

●十一月来館者三万五千名
「…ぼくはいま社会科で第五福竜丸を勉強しています。もっと知りたいので資料があったらいいだけませんか。先生にコピーしてもらってクラスの人たちにのみせながら勉強していきたいの」
●展示館を訪ねて

子どもたちと同じ感動を

梅沢清子

十月にしては肌寒い朝からの雨の中、第五福竜丸見学へと重い腰を上げた。
しかし私は展示物を半分も見終えないうちに、もう次に子どもたちを連れてここに来るべきかを考えていた。パネルや展示品を見るたびに口々に「ひどい」「どうして」とつぶやき、どこにぶついたらいいのかわからない怒りと悲しみと疑問で立ちすくむ思いだった。

私たちが、桐朋小学校PTAの中に、戦争体験を風化させたくないという平和を願う母親たちが「りんごの木の家」という集いをつくったのは五年前だった。戦争体験をつづった冊子の発

行われたのは子どもたちと同じ感動をとの思いからであった。観光地での見学とはとんだ同じ気持ちでの参加は、館内に入ったとたんに消えてしまっていた。一見何の変哲もない船が沈黙の中にあった。そしてたくさんのことを語り、その姿はどんどん大きくなっていくような気がした。私たちはこの身近でおきた恐怖をこのままにしてはいけな

をだしました。
十一月の来館者は約三万五千名。学校の見学は百六十校余におよびます。二十八日には四十校がひきもきらずに来館、説明に追われませんでした。
●解説文を一新、展示替すむ
十一月十三日、協会の第九回理事会在東京・学士会館でひらかれました。①会務報告②上半期収支中間報告③展示館の修理拡充④展示内容の充実⑤賛助会員の勧誘⑥福竜丸だよりの編集⑦その他活動計画の議題について審議。最近の来館者の増加と中学校の見学や外国からの来館者の増加などの特徴が報告され、とくに修理と拡充について対都折衝をつよめることが話し合われました。展示内容の充実についても小川理事から十一月の展示替の具体案が提案され、簡潔で平易な解説パネルの作成に努力することになりました。賛助会員を増やすことについても候補の名簿が用意され、理事の一人ひとりが入会をうたえていくことにしました。たこあげ大会（一月十五日）、三・一ビキニ事件記念集会（二月二十八日予定）の計画も決定しました。



1971年8月、夢の島 (中央、堀田尊生氏)

わが家では毎年夏の真盛りに、江東原水協代表団の一員として広島・長崎に旅立つ夫に、四人の娘たちがそれぞれのお小遣いの中から、カンパとジュース代を父親にプレゼントするのを恒例としていました。旅先からは必ず四姉妹宛の葉書が送られ、大会の熱気が伝わるようでした。第五福竜丸との出逢いもそういう活動の中からでした。夫は江東

草の根のおもい あの頃のこゝと

堀田てる子

の教師でしたから、子どもたちに平和を教える、歴史の生証人としての第五福竜丸に特に思いが熱かったのでしょうか。当時の夫のメモに次のような走り書が残されていました。第五福竜丸は呼びかける私にまわっている 東京・江東の夢の島に まわりには電灯ひとつなく 人家もない無気味な ゴミの海のなかに…… 怒りに起ち上った 杉並のお母さんたちの 平和への願いをこめた運動と ストックホルムの力強い 署名運動の背景のなかで 原水爆禁止世界大会は生れたのだ 私は信じている このエネルギーが 生き証人としての第五福竜丸を 統一の軸としてかかすことのできない第五福竜丸を 第十七回世界大会の代表を先頭に

問題となったのは、護衛船についてのことでした。武装という点では、自衛隊の軍艦があることは言うまでもありません。したがって、プルトニウム輸送には軍艦を使いたいと考えた関係者は、少なくありませんでした。しかし、自衛隊の海外派遣には、法規上の問題も多く、政府はいまのところ、海上保安庁で、この目的のための、新船を建造するという方向に向かっています。ただ新船をつくるためには数億円以上の金を使い、進水までには、あと数年はかかるでしょう。それはさておき、日本の原発は発足以来、はじめは英国に、その後は全面的にアメリカに依存、結局、いままでも独立の原発事業は皆無に近い状態でした。この状態を打破するには、プルトニウムやウラン二三五の自己生産が必要となります。そのため政府も電力界もある程度の自立をはかるため、青森県下北半島の六ヶ所村を中心として、大型の「使用済み核燃料再処理施設」、「ウラン濃縮施設」、「低レベル放射性廃棄物貯蔵設備」を設けようとしています。しかし、アメリカのスリーマイルアイラン

ドやソ連のチェルノブイリの大事故以来、原発の安全性に疑問をもつ人の数が激増しました。六ヶ所村付近の住民の中にも、その近くに大きい原子力施設を設置することに恐れを抱いている人も少なくありません。このうちウラン濃縮設備の建設は昨年の十一月からはじめたようですが、その他の施設の建設がきまるのは、まだ大分先のことのようです。 さて、プルトニウムが、大切な核燃料であることはよく知られていることですが、プルトニウムについて、もう一つの大きい問題は、前にも述べたように、これが核兵器にも用いられるということです。現在、大多数の国は核拡散防止条約に加盟していますが、核兵器を備えた国は、英、米、仏、中、ソのほか、インド、パキスタン、イスラエル、南アフリカの国々もいまは核兵器国だといわれています。問題は、いままでも行なわれてきた「次の核兵器所有国は」に関する国際的アンケートでは、いつも「日本」との答えが圧倒的に多いことです。私たち日本人は、この国際世論に、もっと強い関心を払うべきではないでしょうか。

阪上博士来館

十一月九日、金沢大学名誉教授阪上正信博士が来館。十年前の第五福竜丸の放射能測定の時を思い起したと感慨深げでした。後日、一九七九年四月の測定結果を記した「第五福竜丸の残留放射能」の資料が贈られました。「…右舷甲板でのアスペクトルはセシウム137の顕著なピークとコバルト60のピークがわずかながら検出され…」とありました。

平和随想 (35)

三宅泰雄



いま、わが国の原子力界で問題になっているのは、英、仏に頼んで、放射性廃棄物から回収してもらったプルトニウムを、日本に持ちかえることでしょうか。プルトニウムは一九四〇年にシーボーグ博士らによって発見された超ウラン元素(原子番号九四)で、核分裂性物質として知られています。中でもプルトニウム二三九は、原子炉の中で中性子とウラン二三八と結合し、容易に作り出すことができます。したがって、むしろ原爆の材料としては、ウラン二三五より、簡単に利用することができ、長崎に落された原爆も、プルトニウム爆弾でした。 いま、日本で使われている原発の動力は、アメリカからの輸入品

ウラン二三五です。しかし、原子炉の中でプルトニウム二三九が容易に生成されますから、これをとり出せば、ウラン二三五より、むしろ簡単に核燃料として使うことができます。わが国にも小型の放射性廃棄物処理装置がありますが、廃棄物の量が急に増えてきたため、英、仏にたのんで、プルトニウムを回収してもらっているのです。 そのプルトニウムは、さしあたり、動力炉核燃料開発事業団(動燃)が、敦賀市に建設中の高速増殖炉原型炉(「もんじゅ」)の燃料として使う予定となっています。「もんじゅ」は二年後に完成の予定ですが、プルトニウム輸送がなければ、操業に間に合わないことにもなりません。 プルトニウムの返送については、はじめは無着陸の航空機が予定されていましたが、このため動燃を中心として、安全性の検討をいたしました。ところが、航空輸送について、米国上院議員から疑問が出てきたため、航空輸送から船舶輸送へと方針が一転しました。船舶輸送でも、中途での寄港はなく、また、核ジャック予防のための武装が必要とされています。ここで

きつと後世の人々に 平和のあかしとして 永久保存できるように 二〇〇万募金の決議が 達成することを かく信じて…… 文脈はととのっていませんが福竜丸への想いが伝わってくるようです。 一九七一年七月には集中豪雨によって第五福竜丸は沈没寸前の危機に晒されましたが、多くの方々の努力に支えられ守られました。排水浮上工事が十月には完成し船体が移動されました。保存のための資金調達が急務の年だったと聞いております。 深川不動尊前での街頭募金行動もこの年の暮でした。 当時は皆さん様々な創意工夫をこらして活動していました。夫も第五福竜丸の写真を撮って引伸ばし、小さなパネルを造り保存運動の資金にするというので、子どもたちも真剣にテープ貼りを手伝っていました。 船体の浮上工事が完成して船体にペンキ塗装がされ、第五福竜

丸を美しくする集いなど、子どもたちは父親に連れられて、その歴史にのこる貴重な場面を心に刻んでいます。 残念なことに夫は展示館の完成を見ぬまま四七歳で病歿(一九七四年六月)しましたが、四人の子どもたちは成人しそれぞれ社会に巣立ちました。長女は中学校の教師となり、少女時代の第五福竜丸との出逢いを、今、平和の授業に生かしております。 第五福竜丸のこと、それを支えた多くの人たちの想いを、今は孫たちにも語り継ぎたいと思います。(港母親大会連絡会副会長)